



Case Report

やわぴた 栄養状態の改善が見込める 粘膜皮膚接合部離開に有効であった症例

キーワード

やわらかい凸、栄養状態の改善が見込める粘膜皮膚接合部離開、
創傷治癒の促進、軽い装着感、ストーマ装具交換の時間短縮

はじめに



獨協医科大学病院 看護部
皮膚・排泄ケア認定看護師

篠原 真咲

1999年に獨協医科大学病院へ入職。第一外科・第二外科・泌尿器科・小児外科の混合病棟である外科病棟に配属。2008年に皮膚・排泄ケア認定看護師を取得。褥瘡専従管理者として現在に至る。

当院では、月に30名～40名のストーマ外来患者数がある。その中で、40歳代以下の若いオストメイト患者は、全体の5～7%程度である。若いオストメイトは、仕事などで社会的にも責任ある立場となり、子どもを持っている場合親としての責任もある。今まで当たり前で過ごしていた人生が、疾患によりストーマを造設することで生活が変化する。ストーマを受容していくまでの様々な葛藤を乗り越え、少しずつ患者自身が自分を見つめながら元の生活に戻っていけるよう支援することが、医療従事者の大切な役割と日々実感しながらケアを行っている。

今回、ストーマ造設後に粘膜皮膚接合部離開を生じた患者のケアを通して、装具交換の頻度や時間の短縮が本人の社会復帰に安心感をもたらした症例を経験した。粘膜皮膚接合部に凸面装具を使用するという選択は、凸の圧迫による血流障害のため、粘膜皮膚接合部離開の創傷治癒に影響があると考え使用してこなかったが、やわらかい凸であるやわぴたを使用して粘膜皮膚接合部が治癒し、患者のQOLの向上に寄与できたため、報告する。

症例：40歳代女性

現病歴

1月頃より血便を認めるようになったが、痔と思い放置していた。血便が継続していたため、消化器内科受診。

検査により、直腸癌の診断。8月20日に腹腔鏡下腹会陰式直腸切断術、人工肛門造設術施行。入院時体重は、67.9Kg、退院時64Kg、栄養状態は、術前TP7.2、Alb4.3、術直後TP3.7、Alb2.1、退院時TP6.0、Alb3.2であった。

家族背景

夫と3人の子どもの5人暮らし。

ADL

自立。ストーマケアも全て自分で管理。

ストーマサイズ

37×40×14mm

ストーマ装具選択の実際

術後5日目頃より8時～10時方向にストーマ粘膜皮膚離開を認めるようになる。(写真①)術直後の装具は、単品系平面型装具のお好みカットを使用していた。ストーマの高さも十分あり平面装具での管理も十分に可能であった。そのため、皮膚保護シールで粘膜皮膚離開部を覆うように補正をし、面板を貼付した。本人の技術習得は問題なく、20～30分程度でストーマ装具交換は終了できていた。

しかし、本人から退院後の生活についてヒアリングする中で、一番下の子どもが小学生であり、まだ手がかかる、家事全般は自分がやらなければならないという問題点が明らかとなった。そこで、もう少しケアをシンプルに短時間で実施することはできないかと考えた。入院中、術後14日目にストーマは、ほぼ正円形となっていたため、プレカットのやわらかい凸を使用し、ベルトで密着させることで家事に専念できるのではないかと提案した。早速シャワー浴後に装着をしたところ、装着直後から「装具がすごく軽い!」と装着感の良さに驚かれた。また、今まで皮膚保護シールを適切な大きさにあわせ、面板をカットし装着していた時間がほぼ“0”となったのである。着け心地も軽く本人より「もっと早く出会いたかった!!これなら、家に帰ってもできそう!」と前向きな発言が得られた。術後18日目の退院日に装具交換を行い離開部の観察を行い、創部は縮小傾向であったため、継続使用することとした。

初回ストーマ外来で創部の確実な治癒が確認できた。(写真②)また、装具交換にかかる時間は本当に気にならず、4日目に張り替えることができていると報告を受けた。また、漏れずに管理することができ、装着感の軽さから『私そうだ、ストーマあったんだ!』と時々ストーマ造設したことを忘れてしまえるくらいだと感じられており、精神的にも安心感をもたらすことができていると感じた。

ストーマとなることを外来で告知され、術前オリエンテーションを実施している中で、共に泣き一緒に支えていくことを誓ったあの時の彼女からは予想していなかった前向きな姿勢に私もうれしかった。これから先も、色々なことがあるかもしれないけど、共に頑張っていていきましょとエールを送り続けている。



写真①



写真②

考察

今回、ストーマ粘膜皮膚離開にやわらかい凸を使用した症例を経験した。凸部分は6mmの高さであったが、非常にやわらかいため、過度な圧迫を回避しながらストーマ近接部の密着に貢献していたと考える。最終的に、離開部は完治し、皮膚障害を起こすことなく順調な経過をたどっている。(写真③④)今回の症例では、術後の栄養状態も早期に回復したため、より相乗効果で粘膜皮膚離開が早期に治癒したことも大きな要因であったと考える。粘膜皮膚離開の程度によっては、見た目が想像以上にショックを与えることもあるため、早期に創傷治癒を目指すことが精神面での安定につながれる。

また、平面型装具に用手形成皮膚保護剤を使用する際、使用量によっては予想以上に腹壁に圧迫が加わることもある。装着感の軽さを感じられたことは患者のQOL改善にもつながった。

自宅に帰ると入院中よりも活動量も増え、さらにやらなければならないことが多いのは、若いオストメイトの特徴でもある。ストーマ装具の交換間隔を生活スタイルにあわせて延ばしたり、交換時間を短縮できたことで、患者が家族との時間を大切にでき、心身ともに穏やかに過ごせたと考える。

今回の症例を通して、栄養状態の改善が見込める粘膜皮膚接合部には、アクセサリー類を使用しなくても、便のもぐりこみを防ぐことができ、創傷治癒の改善に有効であったと考える。さらにコストの軽減にもつながった。

また、やわびたを使用したことで、ケア時間の短縮による有意義な時間を大切な家族と過ごすことができ、QOLの向上に貢献できたと思われた。



写真③正面



写真④上部

まとめ

1. 栄養状態の改善が見込めるストーマ粘膜皮膚接合部離開に対して、やわびたは創傷治癒の促進を妨げなかった。
2. アクセサリーを使用しなくてすむため、ケア時間の短縮、コストの軽減につながる。
3. 患者の背景を十分にアセスメントすることで、より患者の生活環境に応じたケアが提供できる。